リュドミーラ・ヴァーシナ
イ・イ・ルービンと草稿「マルクス貨幣論概説」*

竹　永　　進 訳

＊　ここに訳出したのは *Истоки, социокультурная среда экономической деятельности и экономического познания*（Москва, Издательсий дом Высшей школы экономики, 2011）の最後の部をなすルービン生誕 125 年を記念する特集（Памятники экономической мысли к 125-летию со дня рождения И. И. Рубина）に初めて公表された草稿「マルクス貨幣論概説」（*Очерки по теории денег Маркса*）の前に，その編集刊行にあたったЛюдмира Л. Васина 女史（「ロシア国立社会政治史文書館（РГАСПИ）」の研究員として新メガの編集にも従事）が付したこの草稿の解説論文である。РГАСПИ その他ロシア国内のアルヒーフに保管されていたオリジナル文書資料を駆使して書かれた本論文には，これまできわめて不十分にしか知られていなかったルービンの生涯と著作そして彼を取り巻いていた当時の学問や政治の世界の状況が詳細に語られている。ルービンの主著としての『マルクス価値論概説』は知られていても，これと並ぶ「マルクス貨幣論概説」はその存在さえこれまでほとんど知られていなかったのではないだろうか。このことも含めて，本稿では大方の読者にとって多数の新事実が報告されている。なおいくらかの時間を要する「マルクス貨幣論概説」そのものの日本語訳に先立って，この解説論文をまず訳出紹介するゆえんである。この論文は上記の書物に収録されているが，これとは別に，2011 年にモスクワのロシア科学アカデミー経済研究所において開催されたルービン生誕 125 年を記念するミニコンファレンスへの報告論文集にも，本稿の元となったと思われるペーパーが提出されている。訳者は，このペーパーを，印刷される前の本稿の原稿とともに事前に入手することができた。翻訳作業にあたって三者を仔細に比較してみたところ数カ所に大小の追加や削除や変更があった。訳文を作成するにあたりこれら三者に含まれる情報を漏らさず日本語にするため，削除されていた部分を復元して繰り込んだり変更箇所は比較検討したりという「編集」作業を加えた。ただし，煩雑さを避けるため訳稿中ではこの作業には言及していない。このため，本訳稿は，全体としては上記論文の原型のとおりだとはいえ，やや独自の内容のものとなっている。

なお，本論文の翻訳と本誌掲載は出版元からの承認を得ている。　――訳者注記

「草稿は語らない」という表現は，1920年代のもっとも偉大で独創的な経済学者のひとりであったイサーク・イリイチ・ルービンのここに公刊される著作に対して完全にあてはまる。著者により「マルクス貨幣論概説」という表題の付された奇跡的に残存したこの草稿は，その起草から80年以上を経てここに初めて公表される。この公刊が，悲劇の夭逝をとげたこの学者を回想するひとつのきっかけとなり，そして，わが国の経済学における彼の名の復活のたすけとなることを期待したい。

過去20年間，何十年間も不当に忘却にさらされてきた一連の独創的なロシアの経済学者の名前をわが国の学界に復位させるための，少なからぬ努力が払われた。ヴェ・カ・ドミトゥリエフ，エヌ・デ・コンドラチェフ，ア・ヴェ・チャヤーノフといった名前を挙げればこの間の事情が伺えるであろう。マルクスの経済学説の方法論と解釈の分野で1920年代に指導的な位置のひとつを占めたのがイ・イ・ルービンであった。独創的な理論家，卓越した翻訳者，経済学説の普及者，そして輝かしい弁舌者でもあったルービンは，非常に広い範囲の遺産を残した。その多様な性格は，とりわけこの学者の1920年代から1930年代にかけての生活条件を考えると，衷心からの畏敬の念をよびおこすものである。1920年代にもっとも広く知られたのは，4版を数えたルービンの著作『マルクス価値論概説』（竹永　進訳，法政大学出版局，1993年）であった。また，ルービンの著作『経済思想の歴史』も大きな評判を得て，同じく4つの版が刊行され1920年代において大学の当該科目のもっとも強く求められる教材となった。1920年代末には『マルクス価値論概説』は激しい議論の渦中にあったが，この結果，ルービンと彼の同調者たちの考え方には「ルービンシチナ［ルービンの名に賤称的語尾「シチナ」を加えて作られた合成語］」という侮蔑的な名称が付与され，経済学における観念論的傾向さらにはマルクスの経済学説の観念論的歪曲とさえ非難された。当時の状況の中ではこのことは政治的弾劾と同じ意味を持った。1930年代初頭からはルービンの名前と彼の考え方はもっぱら罵倒的な調子で言及され，その後は経済学の歴史からすっかり抹消された。

ルービンの名前を不存在から救い出そうとする最初の試みをおこなったのはロマン・ロスドルスキーであった。彼は，1968年にフランクフルト・アムマインで刊行された大著『資本論成立史』［時永　淑他訳，法政大学出版局，1973-74年，全四冊］の中で，何十年間も忘れ去られていたイ・イ・ルービンを「優れたロシアの経済学者」と呼んで，ルービンと「スターリン時代の刑務所や強制収容所のなかで命を失［った］」[1] 彼の学派の大部分の支持者たちの悲劇的な運命について報告した。1970年代にアメリカ，イギリスおよび西ドイツでルービンの主著『マルクス価値論概説』と『経済思想の歴史』が翻訳刊行されてのち[2]，ルービンの考え方は，昔日のソビエトでのように，ふたたび内実のある科学的議論の対象となった。ルービンの著作と考え方をめぐる論争において明らかになったのは，読者の前に置かれたものはほとんど50年の歳月を経た古びた著作なのではなく，1960年代から1970年代にかけて流

行した疎外という概念の完全な叙述を実際に含んだまさに同時代の独創的な深い議論に支えられた著作物だ，ということであった。今日もなお，ルービンの考え方の研究はドイツ，イタリア，ギリシャ，日本，カナダ，さらにはブラジルでも，なされている。

1980 年代末に，ア・ユ・メレンチェフは，「生産の規制者としての価値」というタイトルでルービンの論文の断片を『経済科学』誌上に公表[3]して，ルービンという人物に注意をひこうとした。1990 年代に入ってからもこの方向での動きがさらに進んだ。

1991 年のはじめに，イ・イ・ルービンの甥のエム・ヴェ・ジェルチェンコフとヴェ・ヴェ・ジェルチェンコフの両氏が，ヤ・ゲ・ロキチャンスキーの仲介により，ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所の党中央文書館（ЦПА）（現在の「ロシア国立社会政治史文書館」—РГАСПИ）に，ルービンの未完の草稿「マルクス貨幣論概説」とその他若干の文書（ルービンの草稿「リカードの資本についての所説」と彼の写真数葉）を保管のために提供した。この中には，彼の姉のブリューマ・イリイニチュナ・ジェルチェンコヴァ（1884–1969）のルービンの拷問についての回想録，彼の妻ポリーナ・ペトローヴナ・ルービナの流刑地での 1935 年の回想録，そして，イ・イ・ルービンの完全な名誉回復についての文書類のコピーも含まれていた。著作「マルクス貨幣論概説」の草稿の保管は，最初は，イ・イ・ルービンの名誉回復を獲得する試みを自身の没年である 1958 年まで放棄しなかったルービンの妻のポリーナ・ペトローヴナ・ルービナによって，彼女の没後は彼の姉とその息子のエム・ヴェ・ジェルチェンコフとヴェ・ヴェ・ジェルチェンコフによってなされた。このときからイ・イ・ルービンの伝記と学術遺産の研究が始まり，まる 20 年を経て論集 «Истоки» に「マルクス貨幣論概説」が刊行されるにおよんで完了した[4]。1991 年に，ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所党中央文書館のマルクス・エンゲルス著作部門での専門鑑定を経て草稿が受理されると，この草稿を，以前より稀覯本となっていた『マルクス価値論概説』と一緒に出版しようというアイデアが持ち上がった。残念ながら当時この企画を実現することは成功しなかった[5]。

しかしながらルービンの名前をわが国の学界に復帰させるための努力は引き続き行われた。1992 年に筆者とヤ・ゲ・ロキチャンスキーとの共同執筆論文「経済学者イ・イ・ルービンの生涯と著述活動の断面」が発表され（2003 年に再刊）[6]，その後 1994 年にもわれわれの共同論文 2 篇が続いて出た[7]。にもかかわらず，マルクス貨幣論にかんするルービンの草稿の公刊をなしとげるには，さらに 17 年の歳月が必要であった。

こうしたテーマまた一般にルービンという人物に対する関心のなさは，何よりも，科学的世界観としてのマルクス主義の否定，マルクスに対する否定的な態度そしてマルクスの経済理論の経済学の武器庫からの排除，といったわが国の経済理論における状態の根本的な変化と結びついているように思われる。しかしながら，千年紀の節目に明確な姿を現したマルクス・ルネッサンス，イギリスの放送局 BBC が行ったインターネットでの投票の結果，1999

年末の時点でマルクスがアインシュタイン，ニュートン，ダーウィン，カント，等々を引き離して西暦1000年代のもっとも優れた思想家たちのリストの首位を占め，またとりわけ2008年から2010年にかけての世界的な金融危機に関連して現れたマルクス・ルネッサンスは，ロシアにおいてもその存在を示さずにはおかなかった。イ・イ・ルービンの「マルクス貨幣論概説」の草稿が経済学高等学院出版局から刊行されたのも，このような過程の表れのひとつと思われる。ルービンの学術遺産に多くの国で関心が持たれていることを思えば，この草稿をロシア語でそしてロシアで出版することが最も重要なことであった。

＊　＊　＊

ルービンは1886年6月12日にドゥヴィンスク市（現在のダウガヴピルス，ラトビア）の裕福なユダヤ人家庭に生まれた。彼はその境遇にふさわしい伝統的な教育を受けた，すなわち，5歳からユダヤ人男児用初等宗教学校に通い，その後は家庭教師につきギムナジウムで勉強した。ヴィテブスク市での古典ギムナジウムコースの合格者となったルービンは，ペテルブルグ大学の法学部に1906年に入学し1910年に卒業している。法学以外に彼はすでに当時から経済学関係の学科に興味をもった。法学部でこれらの科目を教えていた（この頃はまだ大学には経済学部はなかった）のは，ロシアにおける貨幣流通の諸問題や金融や信用について基本的諸著作を発表していたイ・イ・カウフマン（マルクスは，彼の著作『貨幣・信用学説によせて』，『ロシア諸銀行の統計』，『銀行業の理論と実際』および『価格変動の理論』を原語で研究した），世界的な名声を得た最初のロシアの経済学者エム・イ・ツガン・バラノフスキーであった。後者の主要著作であった『産業恐慌』と『過去と現在におけるロシアの工場』は，ロシア国内のみならず，翻訳（とりわけドイツ語訳）を通じて諸外国にも広く知れ渡っていた。しかしながら，ルービンには経済理論に取り組む機会は，その出自のゆえにロシアでは1917年まで与えられなかった。

大学を卒業したのちルービンはしばらくの間ペテルブルグで公証人役場に勤めた。1912年に彼はモスクワに移住し，そこでも引き続き法務に従事したが，これに文学・科学上の仕事が加わった。1913年から1914年にかけてルービンは民法に関連する最初の諸論文を公表した。1915年から1917年8月まで，彼は土地同盟とモスクワ都市同盟の秘書・事務官として働いた。1917年から1918年には，モスクワ経済保険金庫の法律部門で秘書兼助手をしたが，その一方で種々の雑誌の編集にも加わった。

ルービンの初期の刊行物は法律実務上の諸問題に関連するものであった。最初の著作（1913年）は，『使用人と腹心の法的に禁止された行動に対する雇い主と委任者の責任条件について』[8] というものであった。さらに，相続，軍人恩給にかんする諸法律への注解がこれに続いた。1917年の2月革命後，ルービンは社会・経済的主題に向かうことになった。彼は新聞「イズベスチヤ」に当時の経済・社会問題について10本以上の論文を発表した。その後の1917年から1919年にかけては，新聞「労働世界」や「食料問題」にも寄稿している。次に掲

げるのは，この時期にルービンが発表した論文の若干のものの表題である：「都市管理と失業との闘い」，「職業安定所と生産の制御」，「労働義務」，「投機との闘いと商業従事者」，「工場の国有化」，「岐路に立つ社会保険」，「ストライキと労働者の収入」，「十月革命と労働立法」，「ドイツにおける革命と国民経済」，「ハンガリーにおける社会諸階級」，「オーストリアにおけるプロレタリアート」。ソビエト・ロシア初期のロシア経済の状態についての具体的データ，また，これと同時代のドイツ，ハンガリー，オーストリアにおける社会状態と経済の分析のゆえに，今日の読者にとってもこれらの論文は興味を惹くかもしれない。

＊　＊　＊

イ・イ・ルービンは，その政治的見解の点からは，この時代には社会民主主義者であった。彼の政治活動は，彼がユダヤ人労働者組織である「ブント」に加入した 1904 年に始まった。彼はユダヤ人居住地域の労働者のあいだで活発なプロパガンダの仕事をした。1905 年には始めて逮捕されたが，2ヶ月後には 10 月 17 日付けの皇帝の宣言により恩赦を受け自由の身となった。第一次世界大戦中ルービンはメンシェビキ左派――メンシェビキ国際派――に接近した。10 月革命の際には派手な行動には出なかったものの，当初よりソビエト権力の諸機関で働くことが必要と考えていた。同時にルービンはブントのモスクワ組織での活動を継続したが，1920 年 4 月にその内部で分裂が起きると，ロシア共産党（ボ）との融合を拒絶しブントの正統な後継者を自認する組織メンバーの部分と行動を共にした。ルービンはブントの中央委員に選出され，その後中央委員会書記になった。彼はこれ以後も引き続き自分を一貫した社会民主主義者と見なし，全ソ同盟共産党（ボ）の多数の指導方法への不同意を公言した。1921 年 2 月 20 日，ブント中央委員会の総会中にルービンは拘留されブトゥイルの監獄に移送された。しかしながら，捜索によっても彼を反革命活動の廉で告訴するための具体的なデータは何も得られず，ルービンはまもなく釈放された。

その 9ヶ月後の 1921 年 11 月の 5 日から 6 日にかけての夜，ルービンは再び逮捕された。今回は彼の逮捕は社会的な反響を呼んだ。メンシェビキの分派がモスクワ・ソビエトに抗議を行い，モスクワ国立大学の学長で歴史学者のヴェ・ペ・ヴォルギン，モスクワ大学社会科学部学部長でアカデミー会員のエヌ・エム・ルキナ，そして，教育人民委員のア・ヴェ・ルナチャルスキーらが，全露非常委員会（チェカー）に斡旋状を提出した。この頃にはルービンの名は学界・教育界によく知られていたのである。

革命はルービンにとって教育活動に従事する可能性を拓くものであった。帝政ロシアではこの可能性はユダヤ人としての彼には出自により閉ざされていた。赤軍に勤務していた 1919 年から 1921 年にかけて，ルービンはモスクワの軍事技術コースで社会科学を教え，1920 年の夏には人民教育省での教員用講座で政治経済学の講義を担当し，1920 年から 1922 年にかけて人民教育省の委員会で学校と大学のための教育プログラムと計画を策定する作業に従事した。また若干の期間，人文・教育研究所の社会科学部門の主任を務めた。1921 年 2

月からはルービンはモスクワ第一大学の教授になった。同時に彼は，赤色教授養成学院，国民経済研究所およびヤ・エム・スヴェルドロフ記念共産主義大学において，政治経済学を講じた。1919年，カ・マルクス・エフ・エンゲルス研究所（ИМЭ）の将来の所長となるデ・ベ・リャザノフが「科学的社会主義文庫」の仕事にルービンを加わらせ，「マルクス・エンゲルスの文献遺産」[9] 第三巻のドイツ語からの翻訳とその転写の仕事に彼を従事させた。1922年にはリャザノフはすでにИМЭの所長となっていたが，この年カ・マルクス・エフ・エンゲルス著作集の最初のロシア語版にマルクスの全ての経済学上の著作を収録するという問題を提起し，彼はこの仕事にもルービンを引き込んだ。このときから，経済理論とりわけマルクス主義の経済理論との取り組みがルービンの研究関心の基本的領域となった。ルービンの偉大な経済学者・マルクス学者への転換，有能な研究者・翻訳者としての彼の潜在的可能性の開花，これらがデ・ベ・リャザノフの彼の運命への積極的な関わりなしにはおそらくありえなかったであろうことに，疑いの余地はない。

教育活動と自らがロシア語に翻訳したマルクスの諸著作の分析を基礎に，ルービンはマルクスの経済思想と経済理論の歴史についての学術刊行物を執筆した。1920年代の初頭には彼は主導的なソビエトの経済理論家・経済思想史家のひとりになっていた。この事実はルービンの拘禁を解くよう求めるすべての斡旋状の中で強調されていた。1921年11月22日，アカデミー会員ヴェ・ペ・ヴォルギンの保証の下にルービンは釈放されたが，しかし彼の事件への捜査は止まなかった。

輝かしい講演者としての名声を博していたルービンは教育活動も継続した。彼はまた，政治経済学の理論的諸問題とりわけマルクスの経済理論の解釈に関連する諸問題の考究と経済学説史に専心し，当時知られていた西ヨーロッパの経済学者や社会学者の一連の著作を翻訳しこれに自身の注釈を付し，1920年代に刊行されたドイツとイギリスの諸著作の多数の翻訳書に序文や解説文を書き，政治経済学の新しい教科書の書評を書いた。この時代に形を整えつつあった政治経済学と経済学説史の教程の内容に対してルービンが少なからぬ影響力を行使したと言っても，おそらく過言ではないであろう。

ルービンの仕事の際だった特質は，彼がマルクス主義の経済学体系の中でも一般に認められている部分を叙述することは避け，理論的関心の対象となる係争諸問題に注意を向けるよう努めたことである。もっとも広く知られたのは，イ・イ・ルービンの著作『マルクス価値論概説』であった。彼のこの主著は1923年に公刊され，1920年代を通じて三回改訂された。最初この著作は，商品の呪物性の理論とマルクスの労働価値論という二つの部分からなる小さい本であった。この当時カ・マルクス・エフ・エンゲルス研究所の所員であった将来の著名な経済学者エル・ア・レオンチェフが指摘したように，この著作の考え方は，ルービンの指導下で政治経済学の諸問題の研究に従事していた広い範囲の同僚たちには，すでに早くからよく知られていたものであった。

すでに『概説』の初版において，後年議論が展開されることとなる主要な諸命題が基本的には定式化されていた。直接論争には加わらなかったものの，ルービンは事実上その著作の中で，1920 年代初頭に広まっていたマルクスの労働価値論と商品の呪物性論の解釈に異を唱えていた。この解釈は，とりわけ，マルクスの『資本論』第一部のロシア語版へのペ・ベ・ストゥルーヴェの注釈（サンクト・ペテルブルク，オ・エヌ・ポポヴァ，1906 年）とア・ア・ボグダーノフ，イ・イ・スチェパーノフの『政治経済学教程』（第 2 巻第 1 分冊，モスクワ，国立出版所，1919 年：初版は 1910 年）に示されていた。ストゥルーヴェは価値論を，商品資本主義経済の現実とは関係のない輝かしい歴史的余論と規定した。ボグダーノフやスチェパーノフは，マルクスの体系における商品の呪物性を，価値概念とは直接の関係を持たない『資本論』の不自然な部分として，あるいは，階級社会の社会的イデオロギーの要素として，扱った。抽象的労働は彼らにより生理学的意味での労働支出として規定され，価値の大きさは労働支出に比例するものとされた。一面では，当時『資本論』の新しい翻訳と刊本がなかったこと，また他面では，上記の諸版が評判を得ていたことを考えると，イ・イ・ルービンの著作の内容と論理がより理解しやすくなる。

マルクスの方法論に立脚して，ルービンは，『資本論』では十分に展開されていない価値論上の最重要な諸側面，すなわち抽象的労働と複雑労働の還元の諸問題を，さらに考究する独自の試みを企てた。労働価値論と商品の呪物性の諸問題の叙述において，彼は，1903 年にドイツ社会民主党の理論誌 *Die Neue Zeit* と *Der Kampf* に発表された「マルクス批判者としてのベーム・バヴェルク」と「マルクスにおける理論経済学の問題設定」というエル・ヒルファディングの二論文における労働価値論の方法論的諸問題の分析にまずは依拠しつつ，古典的マルクス主義の伝統の代弁者として登場した。経済的諸過程の物質的（「物的・技術的」）内容と社会的形態，つまり今日風の言い方をすれば，その物質的（物的）形態と社会経済的内容（本質），の区分けという方法論的原則の基礎付け，これがルービンの構想の重要な要素であった。この概念の源泉はエル・ヒルファディングの諸著作にさかのぼるが，しかし，わが国の文献におけるこの原則の基礎付けと発展に対する顕著な貢献はまさしくイ・イ・ルービンがなしたことである。経済諸過程の物的形態と社会経済的内容との区分けの原則を貫くことにより，生産のさまざまな社会的形態の分析にかかわるマルクスの経済学上の遺産を生かすための前提が作り出された。これは 1920 年代においてもさらに後の時代においても大きな意義をもった。

ルービンは，商品の呪物性の分析にさいして物的なものと観念的なものとの相互関係の理解にきわめて慎重に接近した。彼は商品の呪物性の問題を，当時の文献で一般に受け入れられていた定式よりもはるかに広く提起した。すなわち，マルクスは，物象間の諸関係の背後に人間間の諸関係を暴き，実際には生産過程における人間間の物象を介した諸関係から生じる諸属性を物象に帰属させる人間意識の幻想を商品経済が生み出すことを暴いた，とルービ

ンは強調した。ルービンが断じたように，マルクスは，物象間の諸関係の背後に人間間の生産諸関係が隠されることだけではなく，反対に，商品経済においては，人間間の社会的生産的諸関係が不可避的に物象的形態を取り物象を介して以外には発現しえないことをも，示した。商品経済の構造から，物象が特別な極度に重要な社会的役割を演じ，社会的諸属性を獲得する，ということになる。人間の思考の幻想と迷妄から，物象的経済的諸範疇は一定の歴史的に規定された生産様式つまり商品生産の生産諸関係にとっての「客観的な思想形態」に転化する。商品の呪物性の理論は，ルービンによれば，商品経済の生産諸関係の一般的理論，政治経済学のいろは（入門）に転化する。

商品経済における自律的で相互に絶対的に独立した生産者間の結びつきと，彼らの活動の媒介された間接的な規制が市場と商品交換を通じて実現される限りでは，人間間の社会的諸関係は不可避的に物象的形態を取る，とルービンは強調した。すなわち，商品経済における労働生産物としての物象は，商品生産者を支配する力として現れるのである。この点にルービンは（マルクスに倣って）商品の呪物性の客観的側面を見た。ルービンは，商品世界が生み出す呪物性が客観的な現実性でありまた同時に人間意識の産物でもあることを示した。このアプローチはソビエトの哲学者エ・ヴェ・イリエンコフの諸著作[10] においてさらに発展させられた。

ルービンは，マルクスの価値論の分析によって次の結論にいたる。すなわち，マルクスの価値論における主要なものは，商品の価値がその生産に支出された労働量に依存するということの証明ではなく，商品資本主義経済の生産諸関係が不可避的に価値の形態を取り，労働が価値においてのみ表現されうるということの理解である。マルクスは物象的に表現される価値の現象から出発し，分析の結果，共通なものは労働であるという結論にいたった，と思いなすのは誤っている（このような問題設定はマルクスの先行者たちにみられた），とルービンは考える。ルービンの解釈では，マルクスの思考の行程は本質的にこの逆である。すなわち，商品社会においては個々の生産者たちの「私的」労働は労働生産物の価値を介してしか社会的労度に転化しえない。

ルービンが強調するように，マルクスが問題にするのは，生産要素としての労働ではなく，社会の生活の基礎としての人々の労働活動と，この労働が組織される社会的諸形態である。ルービンは，商品資本主義経済のこの組織を研究して，交換が生産者たちの結びつきの唯一の形態として排他的な役割を演ずる，という結論にいたる。彼の意見によれば，（そのものとしての交換ではなく）交換の社会的形態と交換の商品社会の生産との結びつきとの研究，これこそがマルクスの価値論の対象をなすものである。マルクスの価値論の質的側面の量的側面（価値の大きさについての問題）に対する優位性を強調しつつも，ルービンは，価値論を純粋に論理的な構築物であるとしたり，またはその作用を純粋な商品経済に限定したりする解釈に対立して，商品資本主義経済の分析にこの理論が適用可能であることを強く主張する。

ルービンによるマルクスの『資本論』の方法論の研究を背景とする論文「カ・マルクスの『資本論』の第一章のテクストの歴史によせて[11]」は，現在でもなお興味深いものであり，ルービンはこの論文で，著作『経済学批判』から『資本論』にかけての価値と交換価値についてのマルクスの学説の発展を詳細に追跡し，『資本論』第一部の第一章の分析対象としての「発展した商品経済と発展した交換価値[12]」の諸法則の理解にとって，この分析の持つ理論的意義を強調した。これとの関連において，マルクスの『資本論』の第一部第一篇の研究対象にかんする 1970 年代の議論[13] が想起されてよいであろう。

『マルクス価値論概説』には，抽象的労働の概念，複雑労働の単純労働への還元の問題，マルクスの経済理論全体における価値論の位置の理解といった，マルクスの価値論の重要な諸側面の，『資本論』と比べてより展開された試みが含まれていた。

ルービンの議論の体系において大きな位置を占めているのが価値の内容と形態についての問題である。ルービンは，価値論の領域におけるマルクスの優位性の問題は何よりも価値形態についての学説の仕上げと結びついている，という命題を（まったく正当にも）根拠付けた。

価値はルービンが強調したように社会的現象である。価値存在はそのうちに一原子の物質も含まず，マルクスにおける価値概念は，彼の言葉によれば，社会学的・歴史的性格を帯びている。交換における抽象的労働という形で，個々の商品生産者の具体的労働の抽象的労働への転化が生じる，とルービンは主張した。抽象的労働という概念は，商品経済においては生産過程そのものではなく交換行為において個々の商品生産者が「結びついている」という，労働組織の社会的形態の特質である。さらに，ルービンはその著作の初版では，労働は流通の部面では価値も剰余価値も作り出さない，というマルクスの命題に異議を唱えていた。彼は後の諸版ではこの主張を撤回した。また後の諸版になると，ルービンは「抽象的労働は交換によって作り出される」という彼の定式の断定的調子を和らげた。

『マルクス価値論概説』で展開されている，抽象的労働と具体的労働，商品の呪物性，疎外，等々についてのルービンの考え方は，政治経済学の分野における 1920 年代の理論的討論の中心に置かれた。『概説』をルービンの同時代人たちはマルクスの価値論のもっとも真摯な研究のひとつと評価した。周知のように，当時マルクス主義のもっとも権威ある精通者であり党の理論家であると見なされていたブハーリンは，イ・イ・ルービンの仕事を非常に高く評価した。厳格にアカデミックな文体で書かれ眼前に繰り広げられている現実からかけ離れた『概説』は，プロパガンダのための単純化や独断性から自由なマルクスの理論への科学的で創造的なアプローチの基礎を据えた。1920 年代だけでなくその後の期間を通じても，ソビエト科学には，議論の余地を残さなかったわけではないとはいえ，同じ理論領域においてルービンのこの著作の水準に達し得たような仕事はひとつもなかった。

『概説』初版の出現は時間的にルービンの新たな逮捕（1923 年 2 月 27 日）と重なった。「積

極的な反ソビエト活動を理由とする」国家政治保安部（ГПУ）の委員会決定により，アルハンゲリスク収容所に3年間拘禁されることになった。近親者や知人（この中には当時のソビエト社会主義共和国連邦駐ドイツ大使エヌ・エヌ・クレスチンスキーも含まれていた）の尽力は，この時期心臓神経症，肺結核，胃疾患に苦しんでいた虚弱な健康状態のルービンの北の地への移送を延期させる助けとなった。しかしながら1923年の秋にはそれでも彼はスズダリの収容所に送られた。しかし，急激な健康状態の悪化のためやがてふたたびブトゥイルカの監獄に送還された。ルービンは1923年10月28日付けのスズダリ収容所からの手紙の中で，スズダリでの拘禁は，ブトゥイルカの「きわめて厳しい体制」でさえ及ばないほど，私の健康に苦痛を与える破壊的なものです，と書いている[14)]。

なお一層驚くべきことに，ルービンが留置施設でまた後には流刑地で過ごした時間は，集中的な学問研究作業で満たされていた。逮捕の当時彼はさまざまな出版機関からのまたИМЭからの多数の要請や依頼をこなしていたのである。監獄でも仕事を続けるために，ルービンは，なによりもデ・ベ・リャザノフの支持のおかげで，すべての必要な書籍・雑誌その他の資料を受け取っていた（当時はまだこのようなことができた）。とりわけ，リャザノフからの依頼により，ブトゥイルカの監獄で（1924年6月）ルービンは，マルクスの著作『経済学批判』のロシア語への新たな翻訳を開始した。当然のことながら，彼の筆により書かれたものはすべて検閲にかけられた。それゆえに，この時期のルービンの活動の中では翻訳の作業や歴史的・経済的内容の書籍類の学術的編集が圧倒的多数を占めていたこと，拘禁されていたあいだに彼が出版を準備していたマルクスの経済学上の諸著作の注釈には厳密に学術的なアプローチがなされていること，ルービンのこれらの仕事の中に同時代の政治生活や学界状況への何らの示唆も含まれていないこと，これらは偶然ではないであろう。

上のエピソードは1924年12月19日以前のブトゥイルスカの監獄でのことであるが，この日付でルービンの監獄からの釈放とクリミアのカラスバザール市（現在のベロゴルスク市）の流刑地への移送の指令が届いた。イ・イ・ルービンは釈放措置の延期を依頼した。彼はこの依頼の動機を次のように説明した：「私の手元には二件の大きな仕事があり，そのうちのひとつは教科書的性格のもの（『経済学史名文撰集』，約450ページ）で，まもなく国立出版所に入稿の予定であり編集作業の仕上げのために6-7日程度が必要です。直ちに出獄となりますと半年間の仕事の成果である単一の原稿を転送できなくなってしまい，その場合入稿はいくら早くても2-3ヶ月間滞ることになります[15)]。」ルービンの依頼は容れられ彼の監獄滞在は数日間延長された。1924年12月末にルービンは仕事を完成させた。その後になってはじめて流刑地に移送された。出獄の前に彼は次のような依頼を提出した：「マルクス・エンゲルス研究所と国立出版所から依頼されている次の仕事を果たすために必要な文献を探し出すため，また，研究所のための作業の遂行についてデ・ベ・リャザノフと個人的に話しあうため，研究所に二時間ほど立ち寄ること。」

この会見についての許可をルービンは得られなかった。

カラスバザールではルービンと彼の妻は平屋建ての小家屋の二部屋をあてがわれ，クリミアの彼の健康状態により適した土地に移ることを求めるルービンの再三の依願にもかかわらず，二人はそこに 1926 年春まで住んだ。1925 年から 1926 年にかけての冬にルービンの健康状態は急激に悪化し，従来からの諸疾患に加えて重度の関節リューマチを患いこれが心臓病を悪化させた。ルービンの流刑期間は 1926 年 4 月 13 日に終了となったが，しかし，シャ・エム・ドゥヴォライツキー，エム・エヌ・ポクロフスキーその他当時の著名な社会科学者の斡旋にもかかわらず，モスクワ，レニングラードその他の一連の大都市に彼が一定期間住むことはなお三年間禁止された。1926 年 8 月になってようやくルービンはサラトフに居住すべしという決定を受けた。しかしながら，リャザノフ，ルィコフ，および，ブハーリンの斡旋により，1926 年 10 月に三週間ほどモスクワに行くことを許すという決定を受けた。ところが，1926 年 11 月 26 日，合同国家政治保安部（ОГПУ）参事会の特別会議は次のように決議した：「ルービン・イサーク・イリイチを期限前に懲罰から解放し，ソビエト社会主義共和国連邦内での自由な居住を許可する[16]。」

信じがたいことであるが，しかしまさに 1923 年春から 1926 年秋にかけての拘禁と流刑のうちに，ルービンはおよそ 25 件もの研究成果を準備したのである。その中には，根本的な書き直しが施され分量的にも二倍になった『マルクス価値論概説』の第二版も含まれていた。彼がこの期間中になした仕事のうちには，イ・ローゼンベルグの著作『リカードとマルクスにおける価値論』の翻訳と序文の執筆，（エム・エル・カーボとの共著）『国民経済　概説と図解』の第二版，ヴェ・リープクネヒト著『イギリスにおける労働価値論の歴史』の学術的編集とこれへの解題論文，ゲ・レヴィ著『世界経済の基礎』の翻訳（以上はすべて 1924 年の仕事），また，後年に出版されることとなる著作『重農主義者たち』（1925 年），『経済思想の歴史』（1926 年），『西欧における現代の経済学者たち』（1927 年）の準備，これらが含まれる。以上のほかにも，ルービンはマルクス・エンゲルス研究所のために，著作『経済学批判』の翻訳の仕事を継続し，マルクスの手稿「ア・ヴァグナー著『経済学教科書』への評注」をロシア語に翻訳し，雑誌『カ・マルクス・エフ・エンゲルス・アルヒーフ』に一連の論文や書評を寄稿した。彼はまた文集『XVII 世紀から XIX 世紀中葉までの経済学の古典的大家たち』を編纂し，その各篇に彼独自の内容豊かな導入的注釈を付した。この同じ年にルービンは，大ソビエト百科事典初版[17] のために，三篇の大論文――「オーストリア学派」，「減価償却」，および，「俗流経済学」――を執筆している。

1926 年末から 1930 年 12 月 24 日夜の新たな逮捕まで，ルービンはカ・マルクス・エフ・エンゲルス研究所の研究員であった。残念なことに，研究所におけるルービンの仕事について証言する文書は保存されていない。例外は 1930 年代初頭の ИМЭ の作業文書の中に彼の名前がところどころで言及されているが，これらはすでにルービンが逮捕されて後のものであ

る[18]。リャザノフが全ソ同盟共産党（ボ）の政治局と中央統制委員会幹部会に宛てた1931年2月23日付けの手紙の中で証言しているように，ИМЭにおいてルービンは「優秀な働き手，きわめて博識の経済学者，そして，優秀な翻訳者」として自分を売り込んでいた。研究所に入るとまもなく，リャザノフは，マルクスの経済学的諸著作の出版準備の中心となるべき経済学部門の指揮をルービンに委ねた。ルービンのすぐ近くで彼を助けていたのは，同部門の共同研究員のエ・ア・カガノヴィッチ，ヴラジミーロフ[19]，ア・エ・レウエルであった。ロマン・ロスドルスキーもルービンの同僚であった［本稿注1）を参照］。

イ・イ・ルービンの率いる小さな集団が差し迫ってすべきであったことは，マルクスとエンゲルスのそれまでロシア語で出版されていなかった多数の経済学上の諸著作の上質の翻訳をすること，既存の訳本を原本と対照し編集すること，マルクスとエンゲルスの諸著作の学術的注解のための資料を収集すること，であった。これらすべての作業はその大部分が今回初めてこのような規模で展開された。何よりもリャザノフの努力によって経済学部門に収集されていた他に類例のない文献のコレクション――政治経済学と経済思想史の諸問題を扱ったおよそ14000冊の書物――は，マルクスとエンゲルスの諸著作の刊行に向けた質の高い準備作業を保障するものであった。刊行は，ロシア語で予定されるとともに，カ・マルクス・エフ・エンゲルス全集（MEGA）の最初の版として原語でもなされることになっていた。MEGAの準備作業もこの時期に開始されたのである[20]。

ルービンの指導と直接の参加の下に一連のテーマごとの著作集の刊行が準備された。その中には，『賃労働と資本』，『住宅問題によせて』，『エンゲルスの『資本論』評注』，『自由貿易と保護主義』，『マルクスとエンゲルスの農民論』が含まれていた。ルービンは，マルクスとエンゲルスの諸著作の出版以外にも，政治経済学の古典的著述家たちのロシア語への翻訳，とりわけ，ア・スミスの著作『諸国民の富の性質と諸原因にかんする研究』のロシア語版の準備にも，従事した。しかしながら，イ・イ・ルービンの研究所での主要な業績は，1927年から1930年にかけてのマルクスの著作『経済学批判』の新版の準備であった。ペ・ペ・ルミャンツェフの訳による『経済学批判』のこの時期の既存のロシア語版（初版，モスクワ，1896年。第三版，ペトログラード，1922年。第四版，モスクワ，1922年）は不満足なものであった。とりわけ，もっとも重要な経済学用語の翻訳の点から見てそうであった。学術的情報を提供する附属資料も欠けていた。

ルービンがア・ペ・レウエルとエ・ア・グルヴィッチとともに出版の準備をした著作『経済学批判』の新版は，その時代としては学術出版の仕事の模範であった。ルービンはマルクスの著作のテクストの新しい訳文を作成した（「序説」は除く。この部分はエ・ベ・パシュカーニスによる翻訳で公刊された）。用語法が練り上げられ，本文を解説し解明する注解の様式が設定され，そして，情報を提供する索引（人名，文献，事項）も一定の様式に従って作成された。このような刊本に比肩しうるものはこの当時外国にも存在しなかった。『経済学

批判』の新版は，マルクスのこの著作の刊行から 70 年目にあたる 1929 年 6 月に日の目を見た。1930 年にはその第二版が出た。事実上，『経済学批判』のこの刊本はマルクスのこの著作のその後のロシア語諸版にとっての原型ないし基礎として役立った。同じことは，MEGA 版での原語によるその最終版[21] にいたるまで当てはまる。

ルービンとリャザノフが逮捕された後この版が図書館から排除されたのは事実であるが，しかし［今やアドラツキーが所長を務める］研究所は時を移さず『批判』の新版の準備に着手した。その基礎に置かれたのはルミャンツェフの訳本であったが，1924 年に刊行された『経済学批判』のドイツ語版と照合された。この版では，この時すでに逮捕されていたルービンが書いた序文は削除され，ルービンが準備した広範におよぶ学術的情報を提供する附属資料はあまり大きくない人名索引・文献索引に縮約された。この版は 1931 年 11 月 3 日に印刷に回され 1932 年 4 月に世に出た。マルクスの著作『経済学批判』の次の版は 1933 年に出版されたが，その編集者序言では，この版が 1859 年のドイツ語初版に基づいてエル・ア・レオンチェフによって新しく準備されたことが強調されていた。『批判』の準備へのルービンの関与は忘却に委ねられた。しかし，すべての後続する訳本のテクストを比較してみると，他ならぬルービンのなした訳文がマルクスの著作のこれらの「新しい」ロシア語訳の基礎となっていることが示される。

ルービンは，『経済学批判』の彼による版を準備する過程で，『資本論』第一部の第一章の成立史を専門的に研究し，著作『経済学批判』（1859 年）から『資本論』第一部のフランス語版（1872 年から 1875 年）までの，マルクスによる商品分析の歴史を初めて徹底的に分析した[22]。ルービンは ИМЭ での計画的な作業と並行して，経済理論と経済思想史の分野での自分自身の研究を続けていた。彼の『経済思想史』は，1920 年代にはこの学科のもっとも知られた教科書となり，毎年のように版を重ねた。これと並んでルービンは，政治経済学とマルクス主義理論の諸問題にかんする外国とソビエトの文献の広く行き渡った批判的な展望論文を定期的に発表していた。彼は，ハ・ディーツェル，エフ・ペトリ，エフ・ポロック，カ・ミュース，ヴェ・ペ・パターソン，ヴェ・エメットその他の著作の書評を書いた[23]。1920 年代末になると，ルービンの学術著作物のリストは 80 項目以上を数えた。彼は赤色教授養成学院，国民経済研究所，モスクワ大学，ロシア社会科学学術研究機関協会（РАНИОН）経済研究所での教育活動を再開し，政治経済学，マルクスの『資本論』，経済学説史の講義を行った[24]。

1931 年度の研究所の計画には『資本論』と『剰余価値学説史』の新版の準備が記されているが，しかしイ・イ・ルービンがこの仕事に加わることは許されなかった。

1928 年，イ・イ・ルービンの著書『マルクス価値論概説』をめぐる討論が始まった。この討論は当初は学術論争の性格を帯びていたが，しだいに政治的動機によるこの学者の人身攻撃になり変わっていった。ルービンに対して，マルクス主義経済理論の歪曲とか，経済学の

諸範疇への観念論的アプローチとか，形態を内容から切断しているとかいった罪状が課せられた。彼の考え方には「ルービンシチナ」という名称が付与され，彼本人は政治経済学における観念論的傾向のリーダーと宣告された[25]。1930年の初頭に討論を終わらせたのは，全ソ同盟共産党（ボ）中央委員会の理論機関誌『ボルシェヴィク』に掲載されたヴェ・ミリューチンとベ・バリーリンの共同論文「政治経済学における見解の不一致」[26]であった。この頃，ルービンは教育活動から去ることを余儀なくされた。

1930年9月29日，ИМЭ所長への申請書[27]の中でルービンは「経済学部門の指揮に関連する業務」から自分を一時解任してくれるよう願い出た。

1930年11月19日，赤色教授養成学院の所員であったヤ・ムシペルトが「プラウダ」紙に掲載した論文に経済学の討論との関連でルービンの名が出たが，そこで彼は，「暴露されたメンシェビキ・富農の破壊分子集団のメンバー[28]」と呼ばれた。ルービンの名前は，いわゆるロシア社会民主労働党（メンシェビキ）中央委員会連合ビューロー事件において逮捕されたエヌ・エヌ・スハーノフ（ヒンメル），ヴェ・ゲ・グロマンおよびヴェ・ヴェ・シェールの証言に現れた[29]。この件に関連して，ルービンはリャザノフに宛てた1930年9月30日付けの個人的な手紙の中で次のように書いている：「敬愛するダヴィド・ボリソヴィッチ様。スハーノフ事件で告訴されたある者の証言の中で私の名前に言及されている，という噂が伝わってきました。この点に関して，私がスハーノフ事件とは絶対に何の関係もなかったということだけでなく，彼のグループの存在を知らなかったということだけでなく，このようなものの存在の可能性さえ遥かに遠く思い及びもしなかった，ということを断固として宣言することが必要と考えます。私の名前に言及された唯一の動機として考えられるのは，私がスハーノフと個人的な知り合いであり，いつか日曜日の夕方――彼の言葉ではいつも在宅の時間帯――に彼の自宅を客として訪問するよう再三にわたり招待されていたので，これに応えて1929年5月のある日曜日に一度彼のもとを訪ねたことがある，という事情です。その後，1930年5月10日に家内と一緒にモスクワ芸術座にオテロの観劇に行った際にそこで偶然にスハーノフに出会うまで，私はまる一年間彼のところに行ったことはありませんし，どんな場所でも彼に出会ったことはありません。再度来訪するようにという親切な招待を受けましたので，私は1930年5月18日の日曜日に彼の自宅を訪問しました。最初の訪問後も，二度目の訪問後も，私にはスハーノフの何らかのグループの存在を思い当たるようないかなる理由もありませんでした。イ・ルービン。1930年9月30日[30]。」

ムシペルトの論文が「プラウダ」紙に掲載されたのを受けて，ルービンは，1930年11月22日付けで同紙編集部宛の書簡をもってこれに回答した。その中で彼は自分が何らかの「破壊分子」集団に関与していることを否定した[31]。ルービンは次のように書いている：「通信記事の筆者はスハーノフ-グロマンの集団を念頭に置いているようですが，組織面でも思想面でも直接的にも間接的にも，私はこの集団とは絶対に何の関係もありませんでしたし，このよ

うな集団に対しては断固たる非難をもってする以外に関わりようがありません[32]。」文書資料からも裏付けられるように，「プラウダ」編集部宛てのルービンのこの書簡は，ИМЭ の党組織ビューローが 11 月 22 日にルービンに対して，次の基本的な三点についての釈明を書簡の形で要求したその日に書かれている。その三点とは次のような内容のものであった：「1. スハーノフ-グロマンのメンシェビキ破壊分子集団との関係（単に形式的なことではなく，本質的な問題として）。2. メンシェビキ党とその中央委員会との関係，ソビエト社会主義共和国連邦内のメンシェビキの残党との関係。3. ソビエト権力および社会主義建設との関係」。また同ビューローは書簡を印刷公表することを提案している[33]。1930 年 12 月 1 日，ルービンはマルクス・エンゲルス研究所の党委員会に宛てて詳しいメモを書いたが，その中で次のように述べている：「1930 年 11 月 30 日に委員会から私にいくつかの質問がなされ，それらに対する回答は必ず書簡の形でなすようにという提案を受けた。このような形で私に対して査問がなされた以上，私は研究所での仕事を継続することは自分にとって不可能であると考えました。そして，12 月 1 日には研究所当局に私を研究所員のポストから除外してくれるよう依願する届け出書を提出しました。しかしながら，私が研究所を去るのは上のようにしてなされた質問に根本的に回答するのを厭ってのことであるように解釈されたくなかったので，私は直ちに質問に回答することが必要と考えました[34]。」さらに，ルービンはスハーノフと会った話を繰り返したが，党のビューローが彼の前でなした質問については次のように宣告した：「私はメンシェビキ党からは今からほぼ 8 年前に離れており，それ以来この党とは何らの関係もありません。ソビエト権力との関係における私の一般的立場は，次の二つの根本的な命題から生じるものです。すなわち，10 月革命は世界史上初めて，プロレタリアート独裁の基礎上に広範な社会主義建設の可能性を切り拓いた。ソビエト権力の弱体化，ましてやその存立に対する深刻な脅威は，何十年間とは言わずとも多年にわたる労働者階級に敵対するブルジョアジーの国際的な激しい反動の原則に棹さすものであろう。これらの根本的な命題から出発して，ソビエト権力によって遂行されまた国民経済再建のための五カ年計画に示される社会主義建設のかの偉大な事業に力のおよぶ限り貢献することを，私の責務と見なしています。この建設の挫折とロシアにおける資本主義的諸関係の復活を画策するあらゆる種類の試みは，それが外国からの介入や封鎖によるものであれ，最近発覚した破壊活動や破壊組織等々によるものであれ，私の観点からすれば，もっとも厳しい非難弾劾に値するものです[35]。」

その同日ルービンはリャザノフに会見を申し入れカ・マルクス・エフ・エンゲルス研究所からの退去を告げる文書を手渡した[36]。リャザノフは退任を受理したが，しかし，ルービンという学者の支えとなろうとして，マルクスの経済学上の著作と『政治経済学の古典的大家たち』シリーズの責任編集者として，出来高払いという条件で研究所の業務にかかわる仕事を継続するよう彼に提案した。1930 年 12 月 24 日の夜，ルービンは逮捕された。彼の生涯の

最後のもっとも悲劇的な時期が到来した。

逮捕から1ヶ月半後，ルービンは自分が連合ビューローの綱領委員会のメンバーであることを認めることに同意していた。また同時に彼は，ИМЭ内の彼の研究室にメンシェビキセンターの文書類を保管していたことを認め，さらには，研究所を解雇された際にこれらの文書を封印した封筒に入れてリャザノフに社会民主主義運動史に関する資料として手渡したかのように供述した[37]。1931年2月8日，ルービンはリャザノフに，取調官から指図されるままに，決して存在したことのない文書を取り調べのために必要だからという口実で返却してくれるよう依頼する手紙を書いた[38]。2月12日の夕刻，この手紙はモロトフ臨席の下にスターリンから直々にリャザノフに提示され，スターリンは研究所での捜索を実施する命令を出した。1931年2月15日から16日にかけての夜，ИМЭ所長のデ・ベ・リャザノフは逮捕された。

ルービンと彼の妻を1935年に流刑地に訪ねた際の彼からの話をもとに書かれた姉のベ・イ・ジェルチェンコヴァの回想録は，ルービン事件の捜査過程についても，ロシア社会民主労働党（メンシェビキ）中央委員会連合ビューローの綱領委員会に所属していたとする自白証言だけでなくリャザノフ逮捕の根拠となった彼の名誉を毀損するデータが得られた状況についても，他に類例のない情報を含んでいる[39]。この回想録に描かれている1931年2月20日のルービンのリャザノフとの対審[40]は，ルービンに用いられた感化の方法――1ヶ月半にわたる果てしのない尋問，睡眠禁止，殴打，懲戒房拘禁――に耐えられなかったルービンが身を以て体験した悲劇を示している。最初の三つの質問の後，リャザノフは対審を中断した。彼は，怯え震えやっとのことで押し出されるイ・イ・ルービンの言葉を耳にした。ベ・イ・ジェルチェンコヴァは書いている。「すぐに弟は監房に連れ戻されました。監房で彼は壁に頭を打ち付け始めました。ルービンの平静さと忍耐強さを知る者は，彼がどこまで追いつめられていたかを理解することができます[41]。」ベ・イ・ジェルチェンコヴァの回想録はエル・ア・メドヴェーデフにより著作『共産主義とは何か――スターリン主義の起源と終結』の中で初めて利用された[42]。

ロシア社会民主労働党（メンシェビキ）中央委員会連合ビューロー事件の公判（1931年3月1日から9日）の判決により，イ・イ・ルービンは5年間の禁固とその後2年間の公民権剝奪を言い渡された[43]。最初彼はヴェルフネウラリスクの政治犯隔離所にいたが，その後1933年9月にはまずカザフスタンのトゥルガイ市に，次いでアクチュービンスク市に送られ，そこで彼は州消費協同組合の生産計画作成経済員として働いた[44]。この仕事以外に，彼は学術研究にも従事し続けた。このことを示すのが「資本に関するリカードの学説」と題する短い試論の草稿である。二冊の学習用ノートに書き付けられ[45]ルービンの姉が保管していたが，後にその二人の息子エム・ヴェ・ジェルチェンコフとヴェ・ヴェ・ジェルチェンコフに委ねられた。彼のこの時代の仕事には10件を上回る研究が含まれているが，その中には，カ・

イ・ロートベルトゥス，ア・マーシャル，ジェ・カ・クラークといった経済学における数理学派の代表者たちその他に関するものがある[46]。アクチュービンスクにルービンを訪ねた姉に対して，彼は，モスクワには帰りたくない旧知の仲間たちに合いたくない，と語った。ベ・イ・ジェルチェンコヴァは書いている。「このことは，体験したすべてのことのために彼がいかに深い衝撃を受けていたかを示すものでした。ただ彼の生来の大きな楽天主義と深い科学的関心とだけが彼に生きる力を与えていたのでした[47]。」

1937 年 11 月 19 日，ルービンは再び逮捕され，トロツキスト反革命組織を創始したという廉でアクチュービンスク州内務人民委員部三人委員会より銃殺刑の判決を受けた。1937 年 11 月 27 日（別のデータによると 25 日[48]）判決は執行された。

1989 年から 1991 年にかけて，イ・イ・ルービンは 1920 年代から 1930 年代にかけての例外なくすべての事柄について名誉を回復された。

＊　＊　＊

イ・イ・ルービンの名前は何十年間も学界からかき消えていたにもかかわらず，彼の諸著作とりわけ『マルクス価値論概説』に表現されていた考え方は，後続諸世代の経済学者の仕事の中に何らかの形で復活し再生し展開された。それほどに彼の考え方は深く独創的で実り豊かなものだったのである。例えば，『経済思想の歴史』講義（1926 年，第四版は 1930 年）は，それ以後の経済思想史の講義の基礎となった。ルービンの著作『西欧における現代の経済学者たち』が植え付けた傾向は，イ・ゲ・ブリューミンの諸著作においてさらに実り豊かに発展させられた。社会諸過程の物的形態と社会・経済的内容の相互関係という問題は，ヴェ・エス・ヴィゴツキーの諸著作において様々な局面から考究された[49]。また，観念的なものと物質的なもののルービンによる取り扱いは，すでに言及したように，エ・ヴェ・イリエンコフによって興味深く展開された。最後に，マルクスの『資本論』の第一部第一篇の研究対象に関する 1970 年代の討論は，ルービンの論文「カ・マルクスの『資本論』第一章のテクストの歴史によせて」をその思想的源泉としていた[50]。このように，1920 年代のもっとも偉大な経済学者のひとりの考え方は，その禁止と著者の深く悲劇的な運命にもかかわらず，忘却の草によって覆われていたのではなかったのである。

＊　＊　＊

ロシア国立社会政治史文書館（РГАСПИ）に保管されているイ・イ・ルービンの諸資料のうちでも，ルービンの価値論研究の論理的延長である「マルクス貨幣論概説」[51]は確かな学術的価値を有する。この草稿執筆の着想は，おそらく，ルービンがマルクスの著作『経済学批判』の翻訳の仕事に取りかかる過程で得られたのではないだろうか。この草稿のための仕事はブトゥイルスカ刑務所の監房ですでに 1923 年には始められていたように思われる[52]。その後，ルービンの諸報告に示されるように，1926 年から 1928 年にかけて彼は草稿の仕事を継続していた。草稿の仕事が中断したと考えられる理由は，エル・ヒルファディングの著作

『金融資本論』の二つの版本（1918年と1923年）が使用されていること，また，草稿のいくつかの箇所でこの著作からまったく同じ箇所が何度も引用されていることである。

5印刷全紙［1全紙は16ページ分に相当］を上回る分量の草稿は，作業テクストの清書稿であった。それは著者により印刷用として準備されたものであった（このことを示すのは，1ページ目に鉛筆でこのテクストを三部印刷することというメモであり，また，脚注が赤鉛筆で番号付けされていることである）が，本質的には未完のままでもあった。とりわけ，予定されていた序文が書かれていなかったし，個々の箇所の校訂と繰り返し箇所の削除を必要としていた，また，テクスト自体にはすでに出版されていた『マルクス価値論概説』における広範囲の補論の例にならった歴史的性格の補論がなかった。著者が草稿を繰り返し読み直し書き直ししていたことは，多数の書き込み，疑問符，余白の傍線，ペンと鉛筆による訂正と書き加えから明らかである。草稿の最後は，マルクスが区切りを完了させたりテクストの末尾を示したりするために使っていたのと同一の水平線をもって明示されている。

草稿はルービンの主著『マルクス価値論概説』の直接の続きであり，わが国のマルクス主義文献において最初のマルクスの貨幣理論の根本的な研究の試みであった。この著作が『マルクス価値論概説』とその発生において結びついていることは，「マルクスの価値論と貨幣論」というこの草稿の当初の名称にはっきりと示されていた。このタイトルの中の最後の部分が残されたのである。後になってルービンが鉛筆で著作の新しい表題「マルクス貨幣論概説」を書き込んだ。この草稿が表しているのは，とりわけ，最初の著作すなわち『マルクス価値論概説』は新たな著作を考慮せずには完結したものとは決して見なしえない，ということである。二つの著作の連続性と相互関連は争う余地なく明白である。

マルクスの貨幣理論についての特殊研究を執筆することをルービンに促した動機の解明となるのは，ゲ・ブロッホの『マルクスの貨幣理論』（イエナ，1926年）とエフ・ポロックの『カール・マルクスの貨幣理論によせて』という二つの著作の批判的分析を内容とするマルクスの貨幣論に関する展望論文のひとつ[53]で彼が述べていることである。ルービンはそこで次のように主張している。「マルクスの貨幣理論は最近にいたるまで，経済学文献において体系的な検討に付されることがなかった。マルクスの価値論が膨大な文献を生み出しているのに，マルクスの批判家たちの大部分は彼の貨幣論を沈黙をもって回避するか，あるいは，大急ぎの，事のついでに書きなぐったような評言で済ませている。マルクス主義文献において，とりわけ，カ・カウツキー，エ・ヴァルガ，オ・バウアーその他が加わった周知の論争［20世紀初頭の「金価値論争」を指すと思われる］において，貨幣理論上の若干の係争問題について議論がなされたが，しかし，マルクスの貨幣理論の全体としての体系的な叙述をその中心課題とする著作はほとんど存在しない。……ここで取り上げ論じているブロッホとポロックの両著作は，マルクスの貨幣理論を対象とする文献における問題の解決に寄与していない[54]。」ドイツで1920年代の中頃に貨幣理論に関する著作が現れたことは，ワイマール共和

国期のドイツの経済と金融システムの状態を思い起こせば理解しうる。この時期ロシアでもまた，第一次世界大戦と革命と内乱の時期に解体していた貨幣制度の整備が進んでいた，そして，この分野での実際の仕事が理論的な基礎付けを必要としていたのである。それはこの時代には当然にもマルクスの理論的遺産に求められた。このように，ルービンの草稿は 1920 年代にとって様々な視点からアクチュアルであったのである。

草稿「マルクス貨幣論概説」は実際上八つの章を含んでいる。そのうち第一章だけに著者による「Ⅰ」という番号が付されている。草稿のそれ以降の各部分のほとんどは新しいページから始まっており，刊行にあたってはそれを，これらの部分を著作の続く七つの章とみなす根拠とした。こうして，草稿「マルクス貨幣論概説」は次の諸章から成り立つこととなる：

Ⅰ．マルクスにおける価値の理論と貨幣の理論

［Ⅱ.］貨幣の必然性

［Ⅲ.］商品の使用価値と交換価値のあいだの矛盾の結果としての貨幣

［Ⅳ.］貨幣の発生

［Ⅴ.］貨幣と抽象的社会的労働

［Ⅵ.］価値尺度

　　価値尺度とは何か

［Ⅶ.］流通手段

［Ⅷ.］蓄蔵貨幣

著作「マルクス貨幣論概説」のかなりの部分はマルクスの経済理論における価値理論と貨幣理論との相互連関の分析にあてられている。商品経済の社会構造の分析から出発する社会学的方法を使用し，「物質的内容」と「社会的形態」（つまり今日風の言い方をすれば，経済的諸過程の物質的形態と社会経済的内容）についての自身の理論に依拠しつつ，ルービンは，価値理論が貨幣の考察なくしては完全に展開しえないのと同様に，マルクスの貨幣理論も彼の価値理論から生じる，ということを示す。その際彼は，価値についても貨幣についてもその分析の出発点となるのはマルクスの場合，発達した貨幣流通を特徴とする資本主義的商品生産であるということに，特に注意を促し，マルクスの価値理論がどの程度まで貨幣経済の諸前提の上に築かれているかを考察する。資本主義的商品経済における価値理論の作用メカニズムの研究から，ルービンは貨幣の由来と社会的機能についての問題の考察に移行し，商品の使用価値と交換価値のあいだの矛盾の解決結果としてのそれらの必然性の問題を考察している。さらに彼は，貨幣の出現過程の分析におけるマルクスの功績がどこにあるのかを示している。

草稿の第二の部分は，マルクスの理論における貨幣の諸機能についての問題の考察にあてられている。ルービンは価値尺度および流通手段としての貨幣の機能に独創的できわめて興味深い解釈をほどこしている。草稿の結びの部分では退蔵貨幣の役割における貨幣の機能を

詳細に考察している。この草稿では支払い手段としての貨幣の分析が欠けており，資本主義経済に必ずともなう部分としての信用制度の発展についても通りいっぺんに触れられているだけで，国際流通の領域での貨幣の機能のありかたについては言及さえない。しかし，支払い手段としての貨幣の機能の分析と国際支払い手段への貨幣の転化の考察とは，マルクスの先行者か同時代人かを問わず他の経済学者たちから彼の貨幣理論へのアプローチを区別する，マルクスの貨幣理論の不可欠の構成諸要素でもあったのである。また，貨幣のいっそうの発展を考えれば，分析のこれらの局面はさらに大きな意義をもつようになっている。

たしかに，1920 年代初頭にはこのようなことはそれほど自明ではなかった。それゆえ，草稿への取り組みが中断されたことに，ルービンがこれらの問題に触れえなかった理由があったのかもしれないとしても，この草稿に上記の諸論点が欠けていることにはこれとは別の説明も可能である。すなわち，ルービンが，価値尺度・流通手段・退蔵貨幣というまさに貨幣の最初の三つの機能の考察に意図的に課題を限定した，ということである。これらは，貨幣のもっとも重要で本質的な特質であり，その理解は価値論と不可分に結びついている。マルクスの体系における貨幣理論の価値理論との内的な結びつきを示すこと，まさにこのような目的をイ・イ・ルービンはこの作業において自己に課したのであった。

『マルクス価値論概説』のときと同じように，ルービンは，貨幣論の叙述にあたってマルクスの諸テクスト（そのもっとも重要なものは『経済学批判』と『資本論』第一部である）の多数の命題に興味深い解釈を与えている。マルクス価値論の解釈，商品を生産する労働の分析，資本主義的商品経済における貨幣の本質と役割の分析，その他の諸問題は，これらの問題点に関心を抱く今日の読者にとってもまた興味を惹くものである。ルービンが多くのスペースをあてて論じているのは，価値法則の基礎上での市場価格形成のメカニズム，再生産過程の不可欠の条件としての商品価値の実現と商品経済の均衡の確立と保持とにおける貨幣の役割である。これらの問題はどれもアクチュアリティーを失っていない。現代の読者からも一定の興味を引くのは，ルービンが分析している貨幣理論についての 1910 年代から 1920 年代の文献，当該問題についてのオーストリア学派の代表者たちを含む 20 世紀初頭の経済学者たちとの論争である。

＊　＊　＊

イ・イ・ルービンの草稿の執筆時期について，彼の姉のベ・イ・ジェルチェンコヴァは彼女のメモに，マルクス貨幣理論の草稿がルービンにより 1931 年から 1933 年にかけて獄中で書かれたという推定を書き残している。しかしながらこの推定は疑わしいものである。

「マルクス貨幣論概説」への取り組みはほぼ間違いなく 1923 年の早い時期に開始された。このことを証明するのが，ルービンが草稿の中で利用している典拠文献の検証である。すべての典拠が時期的に 1923 年以前のものである。とりわけ，ルービンが引用している書籍の大部分は今日，マルクス＝レーニン主義研究所の後継機関である国立社会政治文庫（ГОПБ）

の書庫に保管されているものである。カ・マルクス・エフ・エンゲルス研究所の以前の学術諸部門の蔵書をもとに形成されたこの文庫の専門的な性格を考慮すれば，ルービンが草稿中で利用したマルクス主義理論関係の諸著作は当時 ИМЭ にのみ存在していたものだった，と大きな信憑性をもって推定することができる。そして，たしかにルービンは 1926 年になってはじめて研究所の所員となったが，彼は，獄中にあった期間も含めて，研究所から，資料的な支えとなるもの，仕事に必要な一切の文献を入手していたのである。また，この当時存在していたマルクスの著作『経済学批判』のルミャンツェフによるロシア語訳（1922 年，ペトログラード，共産主義大学出版局刊）にルービンが明らかに不満を抱いていた，という事実も注意を引く。ルービンは彼の『マルクス価値論概説』の中でもこの版に言及している（第四版，1929 年，19 ページ以下を参照）。ГОПБ に保管されている 1922 年版の余白には，草稿執筆に使われたのと似た黒インクで，ルービンが引用している多数の箇所にしるしが付けられている。しかしながら，1922 年のロシア語版によるマルクスの著作『経済学批判』からの引用は，草稿の前半にしか存在しない。草稿のおよそ 101 ページ目から後は，マルクスの著作からの引用はますます，ルービンが準備して 1929 年に出版したこの著作の新版の中にでてくる対応箇所の訳文と一致するようになる。草稿への取り組みの初期段階は『批判』の新訳へのルービンの取り組みに先行し，その後はこの二つの仕事がある期間並行して進んだ，という推定が浮上してくる。『経済学批判』のルービン版は 1929 年 6 月に出版されており，訳稿の印刷引き渡しは訳本が世に出るより半年から 1 年前であっただろうから，訳文と学術附属資料にかかわる編集作業の主要部分は 1927 年から 1928 年にかけて行われた。草稿「マルクス貨幣論概説」への取り組みの最終段階もまたこの時期の前後に位置するとしなければならない，と考えられる。この草稿への最後の言及は，1930 年 2 月 2 日の РАНИОН 経済研究所での，教育業務の免除を依願するイ・イ・ルービンの届け出に含まれている。届け出に記載されている 1926 年から 1928 年までに彼が行った仕事の中に，ルービンは「マルクス貨幣論概説」を挙げている[55)]。

また，草稿本文には 1920 年代末に展開されたルービンの著作をめぐる論争が反映されていない，ということにも注意を払う必要がある。この論争は，ルービンが本書の草稿への取り組みを最後までやり通せなかった理由となった可能性もある。1920 年代末から 1930 年代初頭のルービンをめぐる論争の白熱と性格を考えれば，この著作を印刷に付す機会は著者には残されていなかったということが理解される。このことはまた，なぜこの著作が未完のままに残されたのかということの説明でもある。こうして，イ・イ・ルービンの草稿「マルクス貨幣論概説」は，1923 年から 1928 年の間の時期に書かれたと，ほぼ確実に推定することができる。

この草稿の叢書 «Истоки» への収録掲載が，ロシア内外の研究者の関心を惹起し，イ・イ・ルービンの学術的遺産の全体への関心を呼び覚まさす一助となることを，期待する。

＊　＊　＊

草稿は大きい判型の用紙138枚に黒インクで書かれている。ルービンによるページ数の数え方には誤りがあり（58ページの直後が60ページとなっている），このため，著者による番号付けでは草稿は139ページからなっている。しかし実際には，本文は用紙138枚に書かれているが通し番号で88ページ目は空白になっている。89ページ目から新しい章「流通手段」が始まっているので，88ページ目は先行する章「価値尺度」の最後の部分のために保留されたものと想定することができる。

本書での刊行にあたっては著者による本文の文体上の諸特質がそのまま再現されており，断りなく訂正したのは些細なスペルミスとか明らかな誤記に限られる。ルービンが言及ないし引用している名前やイニシアルは，書き落としがある場合には，本文中の当該箇所に角カッコで挿入されている。草稿本文の句読法は現代ロシア語の標準表記法に合わせてある。本文が書かれているのと同じインクによる本文中の強調は，イタリック［訳文ではゴチック］で再現され，後から著者が行った挿入や鉛筆による強調は当該箇所に傍点を付すことによって示されている。草稿の余白への著者による書き込みは，通常は本文を説明するためのものであり，草稿本文の当該箇所に山カッコ（〈　〉）による本文対応箇所の説明をもって再現されている。著者が余白に鉛筆で引いた傍線も同じ方法で示されている。草稿の余白への赤鉛筆によるマークや書き込みや普通の鉛筆で書かれた若干の数字は，純粋に技術的な性格のものである。これらによって示されたりまた多くの場合通し番号が付されたりしているのは，文献指示や引用またおそらくタイプ原稿のページ数である。これらの書き込みはほぼ間違いなくルービンによるものではなく，後に草稿をタイプライターで転写する過程で加えられたものであるから，本書に印刷された本文には再現されていない。

［以下数行にわたるロシア語原文における特にマルクスからの引用文献の表記方法についての記述は省略。今後公表予定の日本語の訳文では，マルクスからの引用文でMEGA^{2}第Ⅱ部門による大月書店版『資本論草稿集』に訳文のあるものはこれにより，Werke版による『マル・エン全集』にしかないものはこの『全集』により，いずれにも訳文がないものは，MEGA^{2}から直接訳出しその箇所を示す。］草稿本文中の脚注はすべてイ・イ・ルービンのものである。マルクスの著作『経済学批判』は草稿本文では短縮して『批判』と呼ばれている。これは，マルクスおよびその他の著者の著作のその他の短縮形と同じく，本書で公刊するにあたってできるだけ変更せずそのままにしておいた。精確を期すための文献的性格のすべての情報は，必要に応じて本文中の角カッコ内か脚注か本文末の編者注に記されている。文献参照の形式は現代の規則にしたがって統一されている。1917年前にロシアで出版された著作物の表題は現代表記に改められている［ただし，日本語訳があればそのデータのみを示す。他のどの外国語文献についても同様とする］。

＊　＊　＊

草稿「マルクス貨幣論概説」の出版への付録として，イ・イ・ルービンの著作の（年代順に排列した）文献目録が追加されている。ルービンの著作の多くは決定的に散逸してしまっている（このことはとりわけ他の著者たちの著作への序言にあてはまる。これらの序言は，ソビエト社会主義共和国連邦の事実上すべての図書館にあった該当するすべての刊本から，1930 年代の初頭に切り取られた）ので，この文献目録はイ・イ・ルービンの人と作品を研究しようとする人々の興味を引くであろう。

草稿の刊行と解説論文，および，イ・イ・ルービンの著作目録は，
経済学修士エル・エル・ヴァーシナにより準備された。

1922 年から 1931 年までのルービン著作目録（ヴァーシナ編，竹永補足）

以下に掲げる文献目録は，「マルクス貨幣論概説」の本文の後に編者のヴァーシナ女史により掲載された長大な目録（*Там же,* стр. 626–632）のうち，ルービンがマルクス・エンゲルス研究所にかかわって仕事をしていた時代の直接・間接にマルクスの経済理論に関連する部分のみを引き出したものである。また，訳者が以前に調査して確認したルービンの著作物のうち 7 点（すべて 1928 年から 1931 年のもの。No. 30, 32, 34, 35, 42, 43, 52）がこの文献目録に含まれていなかったので，それらを適当と思われる箇所に挿入し，ボールドで表記しておいた。いずれにしても，この文献目録は現存するもっとも完成度の高いルービンの著作リストと言えるであろう。――訳者注記

1. *Основные проблемы политической экономии.* Сб. ст. О. Бауэра и др. / под ред. и с предисловием Ш. Дволайцкого и И. Рубина. М.: Гос. изд., 1922.
2. Рубин И., Кабо Р. М. *Народное хозяйство в очерках и картинах. Сб. отрывков и извлечений.* Пг.–М.: Книга, 1923–1925.
3. Рубин И. И. *Очерки по теории стоимости Маркса.* М.: Гос. изд., 1923.
4. Рубин И. И. [Вступительная статья к кн.:] *Либкнехт В. История теории стоимости в Англии и учение Маркса* / пер. с нем. В. А. Феофанова; под ред. и с предисл. И. И. Рубина. М.: Моск. рабочий, 1924. (Экономическая серия. Под общ. ред. Ш. Дволайцкого.)
5. Рубин И. Политическая экономия. Рецензии на кн.: Heinrich Dietzel: Vom Lehrwert der Wertlehre und vom Grundfehler der Marxschen Verteilungslehre. Leipzig 1921. 39 S.; G. Albrecht. Eugen Dührings Wertlehre. Nebst einem Exkurs zur Marxschen Wertlehre. 1914. 66 S.; R. Passow. Kapitalismus. Eine begrifflichterminologische Studie. Jena 1918. 136 S.; Franz Petry: Der soziale Gehalt der Marxschen

Werttheorie. Jena 1916. 70 S. // *Архив К. Маркса и Ф. Энгельса* / под. ред. Д. Рязанова. Кн. I. М.; Л.: Гос. изд., 1924. С. 478–490.

6. Рубин И., Кабо Р. М. *Народное хозяйство в очерках и картинах.* Сб. отрывков и извлечений. 2-е изд., перераб. и доп. Л.; М.: Книга, 1924–1927.
7. *Основные проблемы политической экономии.* Сб. ст. О. Бауэра и др. / под ред. и с предисловием Ш. Дволайцкого и И. Рубина. 2-е изд. М.: Гос. изд., 1924.
8. Рубин И. И. *Основные черты теории стоимости Маркса и ее отличие от теории стоимости Рикардо* // [Предисловие к кн.:] *Розенберг И. Теория стоимости у Рикардо и у Маркса. Критический этюд* / пер. с нем. И. Сегаловича. М.: Моск. рабочий, 1924. С. 5–62. (Экономическая серия. Под общ. ред. Ш. Дволайцкого.)
9. Рубин И. И. *Очерки по теории стоимости Маркса.* Изд. 2-е, перераб. и доп. М.: Гос. изд., 1924.
10. Рубин И. И. [Перевод кн.:] *Леви Г. Основы мирового хозяйства.* Пер. с рукописи. М.: Моск. рабочий, 1924. (Экономическая серия. Под общ. ред. Ш. Дволайцкого.)
11. Рубин И. И. [Перевод и предисловие к кн.:] *Момберт П. Введение к изучению конъюнктуры и кризисов.* Пер. с нем. и предисл. И. И. Рубина. М.: Гос. изд., 1924.
12. Рубин И. И. Производственные отношения и вещные категории // *Под знаменем марксизма.* 1924. № 10–11. С. 115–132.
13. Рубин И., Кабо Р. М. *Народное хозяйство в очерках и картинах.* Сб. отрывков и извлечений. 3-е изд., перераб. и доп. Л.; М.: Книга, 1925.
14. Rubin I. Zwei Schriften über die Marxsche Werttheorie: Franz Petry: Der soziale Gehalt der Marxschen Werttheorie. Jena 1916. 70 S.; Heinrich Dietzel: Vom Lehrwert der Wertlehre und vom Grundfehler der Marxschen Verteilungslehre. Leipzig 1921. 39 S. // *Marx-Engels-Archiv. Zeitschrift des Marx-Engels-Instituts in Moskau* / hrsg. von D. Rjazanov. Bd. 1. Fr. a./M.: Marx-Engels-Archiv Verlagsgesellschaft, [1925.] S. 360–369.
15. Rubin I. Stolzmann als Marxkritiker // *Ibid.* S. 370–386.
16. *Основные проблемы политической экономии.* Сб. ст. О. Бауэра и др. / под ред. и с предисловием Ш. Дволайцкого и И. Рубина. 3-е изд. М.: Гос. изд., 1925.

17. Рубин И. Австрийская школа // *Большая советская энциклопедия.* [1-е изд.] Т. 1. М.: Советская энциклопедия, 1926. С. 244–254.
18. Рубин И. Амортизация // *Большая советская энциклопедия.* [1-е изд.] Т. 2. М.: Советская энциклопедия, 1926. С. 496–499.
19. Рубин И. И. *История экономической мысли: Меркантилисты. Физиократы. Смит. Рикардо. Разложение классической школы.* М.; Л.: Гос. изд., 1926.
20. Рубин И. И. *Классики политической экономии от XVII до середины XIX в. Сборник извлечений из сочинений экономистов с пояснительными статьями.* М.; Л.: Гос. изд., 1926. [Рубин – составитель сборника и автор пояснительных статей.]
21. Рубин И., Кабо Р. М. *Народное хозяйство в очерках и картинах.* Сб. отрывков и извлечений. 4-е изд. Л.; М.: Книга, 1926.
22. Рубин И. И. *Физиократы: Очерк из истории экономической мысли.* Л.; М.: Книга, 1926.
23. Рубин И. И. Абстрактный труд и стоимость в системе Маркса // *Под знаменем марксизма.* 1927. № 6. С. 88–119.
24. Рубин И. И. Из новой литературы о марксовой теории денег (рецензии на книги Блоха и Поллока) // *Архив К. Маркса и Ф. Энгельса* / под ред. Д. Рязанова. Кн. III. М.; Л.: Гос. изд., 1927. С. 491–498.
25. Рубин И. И. *История экономической мысли: Меркантилисты. Физиократы. Смит. Рикардо. Разложение классической школы.* Тбилиси, 1927 (на грузинском языке).
26. Рубин И. И. *Современные экономисты на Западе: Оппенгеймер.-Штольцман.-Аммони.-Петри.-Лифман. Критические очерки.* М.; Л.: Гос. изд., 1927.
27. Рубин И. И. *Абстрактный труд и стоимость в системе Маркса.* Доклад и его обсуждение в Институте экономики. М.: 5-я тип. «Транспечать» НКПС «Пролетарское слово», 1928.
28. Рубин И. И. *История экономической мысли: Учебное пособие для вузов.* 2-е изд., доп. М.; Л.: Гос. изд., 1928.
29. **Рубин И. И. К вопросу об общественном и абстрактном труде (ответ на критику С. Шабса) // *Под знаменем марксизма*. 1928. № 3. С. 99–126.**
30. Рубин И. И. *Очерки по теории стоимости Маркса.* 3-е изд., перер. и доп. с приложением статьи «Ответ критикам». М.; Л.: Гос. изд., 1928.
31. Рубин И. И. Н. Г. Чернышевский как экономист // *Летописи марксизма.*

1928. № 7-8. С. 22-32.

32. ***Основные проблемы политической экономии*. Сб. ст. О. Бауэра и др. / под ред. и с предисловием Ш. Дволайцкого и И. Рубина. 3-е изд. М.: Гос. изд., 1929.**

33. Рубин И. И. Вульгарная политическая экономия // *Большая советская энциклопедия.* [1-е изд.] Т. 13. М.: Советская энциклопедия, 1929. С. 623-630.

34. **Маркс К. *К критике политической экономии*, перевод И. Рубина, 1929, ИМЭ.**

35. **Рубин И. И. Диалектическое развитие категорий в экономической системе Маркса // *Под знаменем марксизма*. 1929. № 4. С. 81-108, № 5. С. 51-82.**

36. Рубин И. И. *История экономической мысли: Учебное пособие для вузов*. 3-е изд., со 2-го доп. М.; Л.: Гос. изд., 1929.

37. Рубин И. К истории текста первой главы «Капитала» К. Маркса // *Архив К. Маркса и Ф. Энгельса* / под ред. Д. Рязанова. Кн. IV. М.; Л.: Гос. изд., 1929. С. 63-91.

38. Рубин И. Новый «Анти-Маркс». [Рецензия на книгу: Karl Muhs. „Anti-Marx". Bd. 1. Jena, Fischer, 1927] // *Там же.* С. 454-463.

39. Рубин И. И. Политическая экономия. [Рецензии на книги Э. Лукаса, А. Грациадеи, Г. Уотона, Г. Паркинсона, У. Эмметта и Б. Оденбрайта:] Eduard Lukas. Spekulation und Wirklichkeit im oekonomischen Marxismus (Eine Untersuchung zum Dogma der kapitalistischen Ausbeutung), 1922. 100 S.; Antonio Graziadei. Preis und Mehrpreis in der kapitalistischen Wirtschaft (Kritik der Marxschen Werttheorie). 1923. 193 S.; H. Waton. The Marxist Introduction and Aid to the Study of „Capital". New-York 1925; H. Parkinson. From Capitalism to Freedom. London 1925; W. Emmett. The Marxian Economic Handbook and Glossary. London 1925; [B.] Odenbreit. Die vergleichende Wirtschaftstheorie bei Karl Marx. 1919. 96 S.) // *Там же.* С. 485-495.

40. Рубин И. И. [Предисловие и научное редактирование книги:] *Кушин И. А. Диалектическое строение «Капитала» К. Маркса* / под ред. и с предисл. И. И. Рубина. М.; Л.: Гос. изд., 1929. (Б-ка теоретической экономии.)

41. Рубин И. И. [Предисловие к книге:] *Реймес В. Введение в историю хозяйства* / пер. с нем. с предисл. к нем. изд. Г. Куно. М.; Л.: Гос. изд., 1929.

42. Рубин И. И. Против вульгаризации марксизма // *Проблемы экономики.* 1929.

№ 3. С. 83–107, **№ 4/5. С.127–156.**

43. **Рубин И. И. Диалектическое развитие категории в экономической системе Маркса // *Проблемы экономики*. 1929. № 4/5. С. 203–238.**
44. Рубин И. И. *Очерки по теории стоимости Маркса. С новым дополнением к статье «Ответ критикам»*. Изд. 4- е. (23–32 тысяча [экземпляров].) М.: Гос. изд., 1929; (31–37 тысяча [экземпляров].) М.: Гос. изд., 1930.
45. Рубин И. И. *Франсуа Кенэ: основатель физиократической теории*. М.; Л.: Моск. рабочий, 1929. (Серия «Жизнь замечательных людей».)
46. Рубин И. И. *История экономической мысли: Учебное пособие для вузов*. 4-е изд., со 2-го доп. М.; Л.: Гос. изд., 1930.
47. Рубін І. І. *Класики політичноі економіі. Від XVII до середины XIX ст*. Збірка витягів з творів економістів та поясняльн і статт і. Харьків–Киів, 1930 (на украинском языке).
48. Рубін І. І. *Історія е кономічно і думки: Меркантилисты. Физиократы. Смит. Рикардо. Разложение классической школы*. Харьків–Одеса, 1930 (на украинском языке).
49. Рубин И. И. Экономические взгляды Томаса Гоббса // *Летописи марксизма*. № I (XI). 1930. С. 18–33.
50. Рубин И. И. Учение Маркса о производстве и потреблении // *Архив К. Маркса и Ф. Энгельса* / под ред. Д. Рязанова. Кн. V. М.; Л.: Гос. изд., 1930. С. 58–131.
51. Рубин И. И. *Учение Маркса о производстве и потреблении*. М.: Гос. изд., 1930.
52. **Маркс К. *К критике политической экономии*, перевод Рубина, 3-е изд. ИМЭ, 1931.**

注

1）ロマン・ロスドルスキー『資本論成立史』，前掲邦訳，第四分冊，862 ページ。

2）Rubin I. I. *Essays on Marx's Theory of Value*/transl. from 3d ed. Detroit: Black and red, 1972; Rubin I. I. *A History of Economic Thought*/transl. and ed. by D. Filtzer; afterword by C. Colliot-Thélène. Ld.: Links Ltd, 1979; Rubin I. I. *Studien zur Marxschen Werttheorie/mit einer Einleitung von A. Neusüss-Fögen*. Fr. a/M.: Europäische Verlagsanstalt, 1973. また次のものも参照。Rubin I. I., Bessonow S. A. u. a. *Dialektik der Kategorien. Debatte in der UdSSR (1927–1929). Interpretationen zum „Kapital"*. Westberlin: Verlag für das Studium der Arbeiterbewegung, 1975. ルービンの考え方の独創的分析を含んでいるのは，ドイツのマールブルク大学に

提出された韓国の研究者 Joe Hyeon-soo の学位論文である。(Cf.: Joe Hyeon-soo. *Politische Ökonomie als Gesellschaftstheorie. Studien zur Marx-Rezeption von Isaak Iljitsch Rubin und Kozo Uno.* Inauguraldissertation zur Erlangung des Grades eines Doktors der Philosophie dem Fachbereich Gesellschaftswissenschaften und Philosophie der Philipps-Universität Marburg, 1995.)

3) Cf.: Рубин И. Стоимость как регулятор производства // *Экономические науки.*1989. № 4. С. 43–44.

4) Cf.: Рубин Исаак И. Очерки по теории денег Маркса // *Истоки. Социокультурная среда экономической деятельности и экономического познания.* М.: Издательский дом Высшей школы экономики, 2011. С. 501–625.

5) 1960 年代にベ・イ・ジェルチェンコヴァにより，イ・イ・ルービンの名誉回復問題が首尾よく解決したあかつきには，カ・マルクスの貨幣理論に関するこの著作をヤ・ア・クロンロードの支持を得て出版しようという試みがくわだてられたことは，よく知られている。しかしながら当時はそのいずれも成功しなかった。おそらくこの当時草稿はタイプで転写されたようである（この著作のタイプ原稿版がクロンロードのもとに存在していて，彼の遺産中に保存されていた可能性があることも，よく知られている）。

6) Cf.: Васина Л. Л., Рокитянский Я. Г. Страницы жизни и творчества экономиста И. И. Рубина // *Вестник Российской Академии наук.* 1992. № 8. С. 129–144; 次の論集に再録。Васина Л. Л., Рокитянский Я. Г. Исаак Рубин // *Российская наука в лицах.* Кн. 1 / под общей ред. вице-президента РАН Н. А. Платэ; сост. Т. В. Маврина и В. А. Попов. М.: Academia, 2003. С. 497–512.

7) Cf.: Vasina L. I. I. Rubin-Marxforscher und Politökonom // Quellen und Grenzen von Marx' Wissenschaftsverständnis. [Hrsg. und Red. C.-E. Vollgraf, R. Sperl, R. Hecker.] (*Beiträge zur Marx-Engels-Forschung.* Neue Folge 1994.) Hamburg: Argument-Verlag, 1994. S. 144–149; Рокитянский Я. Г. Последние дни профессора И. И. Рубина. По материалам следственного дела // *Вестник Российской академии наук* 1994. № 9. С. 828–834.

8) Рубин И. *Об условиях ответственности господ и верителей за недозволенные деяния слуг и поверенных.* (Ст. 689. Т. X. Ч. 1.) М: тип. И. И. Кушнерев и К°, 1913.

9) Aus dem literarischen Nachlass von Karl Marx und Friedrich Engels / hrsg. von Franz Mehring. Bd. 3. 1. Ausg. Stuttgart: Dietz Nachf., 1902; 3. Aufl. Stuttgart: Dietz Nachf., 1920.

10) Ильенков Э. В. Проблема идеального // *Вопросы философии.* 1979. № 6. С. 128–140; № 7. С. 145–158; 次の書物に再録：Эвальд Васильевич Ильенков / под ред. В. И. Толстых. М.: РОССПЭН [ロシア政治百科辞典], 2008. (Серия «Философия России второй половины XX века».) С. 153–214. 次の著書も参照：Ильенков Э. В. Диалектика абстрактного и конкретного в «Капитале» К. Маркса. М.: Изд-во АН СССР, 1960 (E. V. イリエンコフ『資本論の弁証法』花崎皐平訳，合同出版，1972 年)；同書増補新版として次のものがある：Ильенков Э. В. Диалектика абстрактного и конкретного в научно-теоретическом мышлении. М.: РОССПЭН, 1997. また次の論著も参照：Ильенков Э. В. Проблемы абстрактного и конкретного // *Вопросы философии.* 1967. № 9. С. 55–65; Ильенков Э. В. *Диалектическая логика. Очерки истории и теории.* (1974) 2-е изд.,

доп. М.: Политиздат, 1984.

11）Cf.: Рубин И. И. К истории текста первой главы «Капитала» К. Маркса // *Архив К. Маркса и Ф. Энгельса* / под ред. Д. Рязанова. Кн. IV. М.; Л.: Гос. изд., 1929. С. 63–91（「『経済学批判』と『資本論』における価値と交換価値」,「マルクスとベイリー」佐藤金三郎訳,『エコノミア（横浜国立大学)』第 70 号・第 72 号，1981 年。これらは原論文の第一章と第二章の邦訳）.

12）Cf.: Ibid. C. 90.

13）Cf.: Тронев К. П. Предмет исследования первого отдела первого тома «Капитала» К. Маркса // *Вестник Московского университета. Серия VI. Экономика.* 1978. № 4; Do. Учение К. Маркса о стоимости, ее субстанции и форме.// *Ibid.* № 5（次の雑誌に採録：Тронев К. П. Учение К. Маркса о стоимости, ее субстанции и форме（вступление А. Мелентьева）// *Экономические науки.* 1990. № 7）.. Cf. also: Шкредов В. П. Анализ формы стоимости в I томе «Капитала» // *Очерки по истории «Капитала» К. Маркса.* М.: Политиздат, 1983. С. 249–310（シュクレドフ「『資本論』第 1 巻における価値形態の分析」竹永　進・中野雄策訳,『世界経済と国際関係』1984 年，秋期号別冊）；Тронев К. П. О предмете и содержании первого отдела 1 тома «Капитала» К. Маркса // *Российский экономический журнал.* 2007. № 9–10. С. 62–97.

14）ロシア連邦国家保安委員会中央文書館。No P–40156. Л. 68；詳細は次の論考を参照。Васина Л. Л., Рокитянский Я. Г. *Страницы жизни и творчества экономиста И.И. Рубина* … С. 134–135.

15）ロシア連邦国家保安委員会中央文書館。No P–40156. Л. 128.

16）同前。Л. 200.

17）Cf.: *Большая советская энциклопедия.* Т. 1. М.: *Советская энциклопедия,* 1926. С. 244–254; Т. 2. М.: *Советская энциклопедия,* 1926. С. 496–499; Т. 13. М.: *Советская энциклопедия,* 1929. С. 623–630.

18）この当時の慣例として，逮捕された研究員の私物は逮捕の際に没収されていた。それゆえに，研究所におけるルービンの仕事についてのデータ源となるのは，ロシア連邦国家保安委員会中央文書館中央アルヒーフに保管されているルービンの私物ということになる。

19）残念ながら，ヴラジミーロフの名を確認することはできなかった。彼は ИМЭ で 1930 年末まで働いていた。（ロシア国立社会政治史文書館 Ф. 374. Оп. 1. Д. 3. Л. 35）.

20）MEGA の初版［旧メガ］は 1927 年から 1935 年にかけて出版された。第一次メガの計画されていた 42 巻のうち実際に出版されたのは 11 巻（12 冊）のみであった。メガの二回目のアカデミックな版［新メガ］は 1975 年から刊行が開始され，原語によるカ・マルクス・エフ・エンゲルスの全集となることをめざしている（Karl Marx/Friedrich Engels. Gesamtausgabe（MEGA²）.）。この企画の計画された 123 巻のうち，2010 年末の時点ですでに世に出ているのは 65 巻（124 冊）である。カ・マルクス・エフ・エンゲルスのテクストを含む 65 冊に，学術附属資料の 59 冊が加わって 124 冊となる。以下この全集は MEGA² と略記する。メガの刊行についての詳細は次の拙稿を参照。Васина Л. Л. Публикация литературного наследия К. Маркса и Ф. Энгельса в международном издании МЭГА（история, современное состояние и значение）// *Экономическая история России: проблемы, поиски,*

решения. Ежегодник. Вып. 4 / под ред. д-ра экон. наук, проф. М. М. Загорулько. М., Волгоград: Изд-во Волгоградского гос. ун-та, 2002. С. 119-152.

21) MEGA² Bd. II/2. Berlin: Dietz Verlag, 1980. S. 94-245, 370-402.

22) 先の注 11）を参照。

23) 次の雑誌・巻号に掲載。*Архив К. Маркса и Ф. Энгельса* / под ред. Д. Рязанова. Кн. I. М.; Л.: Гос. изд., 1924. С. 478-490; Кн. III. М.; Л.: Гос. изд., 1927. С. 491-498; Кн. IV. М.; Л.: Гос. изд., 1929. С. 454-463 и 485-495.

24) Cf.: Рубин И. И. Личное дело. ロシア連邦国立文書館（ГАРФ). Ф. 5144. Оп. 2. Д. 4. Л. 122-135.）

25) Cf.: Шабс С. Еще раз о проблеме общественного труда в экономической системе Маркса (ответ на антикритику И. Рубина) // *Под знаменем марксизма*. 1928. № 7-8. С 112-149; Бессонов С. А. Против выхолащивания марксизма // *Проблемы экономики*. 1929. № 1. С. 123-144; № 2. С. 78-117; *Рубинщина или марксизм. Против идеализма и метафизики в политической экономии*. Сб. статей / под ред. С. А. Бессонова и А. Ф. Кона. М.; Л.: Гос. изд-во, 1930; Абергауз Г., Дукор Г. *Очерки методологии политической экономии* / с предисл. С. Л. Ронина. М.: Мол. гвардия, 1931. ルービンが政治経済学における「観念論的傾向」の代表者であるという評価は，百科事典『政治経済学』に掲載されたヴェ・エ・マネヴィッチの論文でも繰り返された（次を参照。*Политическая экономия. Энциклопедия*. Т. 3. М.: Советская энциклопедия, 1979. С. 510).

26) Милютин В., Борилин Б. К разногласиям в политической экономии // *Большевик*. 1930. № 2. С. 48-63.

27) РГАСПИ. Ф. 374. Оп. 1. Д. 11. Л. 42.

28) Мушперт Я. За действительную борьбу против леваков // *Правда*. 19 ноября 1930.

29) Cf.:「メンシェビキの反革命組織の裁判（1931 年 3 月 1 日から 3 月 9 日)。公判速記録，起訴状および判決」，モスクワ，1931 年，pp. 17-18, 26, 28-29, 48, 112, 120, 128, 139-150, 170, 229, 359, 360, 425-431.これらの箇所には裁判におけるルービンの自白証言が含まれている。

30) РГАСПИ. Ф. 374. Оп. 1. Д. 11. Л. 43.

31) ロシア連邦国家保安委員会中央文書館。№ Н-7824. Т. 11. Л. 8-9. この書簡のコピーは РГАСПИ にも保管されている（Ф. 374. Оп. 1. Д. 11. Л.45.)。

32) РГАСПИ. Ф. 374. Оп. 1. Д. 11. Л. 45.

33) 全ソ同盟共産党（ボ）マルクス・エンゲルス研究所細胞の 30 年 11 月 22 日の会議の議事録（РГАСПИ. Ф. 374. Оп. 1. Д. 11. Лл. 39, 41.）

34) РГАСПИ. Ф. 374. Оп. 1. Д. 11. Л. 46.

35) 同上。

36) 同上。Л. 47.

37) イ・イ・ルービン事件の資料（逮捕令状，中断措置の選択に関する決議，1931 年 1 月 24 日から 2 月 21 日までの取り調べ調書，その他)。次の資料を参照。『1931 年のメンシェビキ裁判。資料集二巻』第一巻，モスクワ，ロシア政治百科事典，1999 年，554 − 636 ページ：イ・イ・ルービンの自白証言。このうち次の諸箇所を参照：560-563, 566-567, 577-580, 580-582, 586-588,

626-627 の各ページ。

38）ロシア連邦国家保安委員会中央文書館。№ H-7824. T. 11. Л. 160. イ・イ・ルービンのリャザノフ宛ての手紙は，『1931 年のメンシェビキ裁判。資料集二巻』第一巻，モスクワ，ロシア政治百科事典，1999 年，609 ページに初めて公表された。また次の論文も参照。Васина Л. Л., Рокитянский Я. Г. *Страницы жизни и творчества экономиста И. И. Рубина…* С. 140-141.

39）ロシア国立社会政治史文書館（РГАСПИ）。Ф. 374. Оп. 2. Д. 4.

40）1931 年 2 月 20 日のイ・イ・ルービンとデ・ベ・リャザノフとの対審の記録。次の資料を参照。『1931 年のメンシェビキ裁判…』第一巻，モスクワ，ロシア政治百科辞典，1999 年，632-633 ページ

41）РГАСПИ. Ф. 374. Оп. 2. Д. 4. Л. 31.

42）石堂清倫訳，三一書房刊，1973 年，上，215-221 ページ［邦訳書では「ヴェ・イー・ルービナの覚え書」とされている］。

43）「メンシェビキ反革命組織の裁判（1931 年 3 月 1 日から 3 月 9 日）…」466，471 ページ。

44）ルービンの生涯の最後の時期については次の論文を参照。Рокитянский Я. Г. Последние дни профессора И. И. Рубина. По материалам следственного дела // *Вестник Российской академии наук*. 1994. № 9. С. 828-834.

45）РГАСПИ. Ф. 374. Оп. 2. Д. 2. Cf also: Рубин И. И. Учение Рикардо о капитале // *Вестник Российской Академии наук*. 1992. № 8. С. 144-152.

46）Cf.: Рокитянский Я. Г. *Последние дни профессора И. И. Рубина…* С. 830.

47）РГАСПИ. Ф. 374. Оп. 2. Д. 4. Л. 33. メドヴェーデフ前掲書，上，221 ページ［訳文は若干変更］。

48）『1931 年のメンシェビキ裁判…』第一巻，モスクワ，ロシア政治百科事典，1999 年，26 ページ。

49）Cf. For example: Выгодский В. С. *К истории создания «*Капитала*»*。М.: «Мысль», 1970. С.101-103, 259-262; Багатурия Г. А., Выгодский В. С. *Экономическое наследие Карла Маркса* (*история, содержание, методология*). Гл. 16: Вещественное содержание и социальная форма экономических процессов и категорий.-М.: «Мысль», 1976. С. 242-250.

50）先の注 11 と注 13 に挙げられている文献を参照。

51）РГАСПИ. Ф. 374. Оп. 2. Д. 1.

52）ルービンが使用した典拠文献が 1923 年までのものであることを含めた草稿の複合的な評価に基づいて草稿作成作業の開始の時期をこのように推定したが，この推定はその後，ロシア連邦国家保安委員会中央文書館のイ・イ・ルービン事件の関係資料（Д. № P-40154. Л. 102.）により裏付けられた。

53）*Архив К. Маркса и Ф. Энгельса* / под ред. Д. Рязанова. Кн. III. М.; Л.: Гос. изд., 1927. С. 491-498.

54）Ibid. С. 491, 498.

55）ロシア連邦国立文書館。Ф. 5144. Оп. 2. Д. 4. С. 124.